

# 永井荷風 『断腸亭日乗』 管見

——昭和二十年夏、岡山の八十日——（補遺四）

寺 杣 雅 人

## 一 連日の市中散歩と岡山空襲

荷風散人は散歩を好む人である。それは疎開中でも変わらなかった。

荷風の岡山市中散歩は、『断腸亭日乗』<sup>(注1)</sup>（以下『日乗』と略す）によれば、昭和20年6月17日（日）の朝食前に始まっている。すなわちそれは「ホテルの食膳あまりに粗悪なれば」などという理由で岡山ホテルから旅館松月に宿替えをした次の日である。しかも散歩初日のこの日は夜になってからも「出で、近巷を歩す」とあり、2度も散歩に出ている。

『松月』へ移ってやっと我々は安静を取戻した。荷風も私達もこの宿が気に入った」と菅原明朗は『荷風罹災日乗註考』<sup>(注2)</sup>に書いている。内面的にも散歩が

可能な状況が生まれていた。

『日乗』によると、荷風はこの17日から21日までの5日間、連日宿の松月を出発して近隣を歩き回っている。松月は、当時の県庁や裁判所の側にあり、一級河川の旭川やその河岸にある岡山城、中州にある後樂園も近い。散歩好きには好適の宿であった。17日の『日乗』には、「風光頗佳なり」と近巷の風景を愛でる言葉も見える。

こうして荷風の岡山市中散歩はこの日から5日間休みなく続くことになるが、6日目となる22日の『日乗』には散歩に関する記述がない。それにはやはりやむを得ない事情があった。

六月廿二日、軽陰、風冷なり、早朝警報あり、忽砲声を聞く、解除のサイレンをき、しは正午

に近き時なり、倉敷、尾の道の辺爆撃せられし由、

空襲警報下、「砲声」の鳴り響くなかでは荷風散人といえど散歩に出るわけには行かなかつただろう。

この日の記事は次のように続いている。

この地の人開戦以來一たびも戸障子を震動せしむるが如き爆音を知らず、倉皇狼狽後樂園の河畔に走りしものも多かりしと云、

米軍の無差別爆撃を幾たびも経験し、東京では2度も住まいを焼かれた荷風にとって、初めて爆撃機の接近を目の当たりにしたこの地の人々の「倉皇狼狽」ぶりはやや大げさ過ぎるように見えたのである。

実はこの爆撃機は浅口郡連島町および児島郡福田村（現在の倉敷市水島）に向かつていた。水島空襲である。この日三菱重工倉敷航空機製作所（現三菱自動車工業水島製作所）は110機のB29によって午前8時36分から1時間足らずの間に計603トンの爆弾が投下され、工場は壊滅状態となった。<sup>(注3)</sup>

当時の倉敷航空機製作所では、日本海軍の一式陸攻や紫電改を生産しており、水島空襲は米軍が日本

の軍需産業を破壊する目的で行った精密爆撃であった。

これが明るい日中の空襲であったため、岡山市街地からでもB29の機影がはっきりと見えたという。爆発による震動が伝わってきたという証言も多く残されている。

荷風は「倉敷、尾の道の辺爆撃せられし由」と書いているが、倉敷の方は確かにその通りであった。だが、尾道市が爆撃されたという事実は確認できない。誤報であったと思われる。

そしてこの地岡山市もそれだけでは済まなかつた。

その1週間後となる6月29日の午前2時43分、ティニアン島の基地から飛び立ったB29の最初の1機が岡山市上空に現れ、焼夷弾を落とし始めた。それから午前4時7分までの1時間24分の間に計138機のB29が約890トンもの焼夷弾を岡山市中に投下。これは水島空襲とは異なり、明らかな都市爆撃であり無差別爆撃であった。これにより当時の岡山市街地の63パーセントが焼け野原になり、2000人以上の犠牲者が出たのであった。<sup>(注4)</sup>

米軍は空襲に先立ち偵察機を飛ばして上空から岡

山市内を撮影し、「リト・モザイク」と呼ばれる精密な写真を作製している。これに爆撃中心点や爆撃機の進入角を書き入れ、爆撃の際に各機がこれを携行した。

その爆撃中心点は、南北に路面電車の清輝橋線が通る柳川筋と東西に延びる現在の県庁通りの交わる交差点あたりであった。今は北東の角にNTTクレドのビル、向かいの南東の角に岡山中央郵便局のビルが建っている。

米軍が焼夷弾投下の目標にしたこの交差点は、荷風の宿泊していた松月と直線距離でわずか500mにあった。当然松月も燃え尽きることになるのだが、午前2時過ぎ、就寝中の荷風はどのように対応したか。

同行の明朗と智子は6月24日から夜具などを取り明石の西林寺に戻っていた。そのため、幸いこの夜も不在であった。

## 二 ふたつの異なる逃走経路

荷風は、この夜のことを『罹災日録』<sup>(注)</sup>(以下『日録』と略す。)では次のように詳しく書き残している(『日

乗』では逃走経路など詳細には記されていない。この『日録』は原本の『日乗』を書き改めたものである。『日乗』の本文は後で紹介する)。

この夜二時頃岡山の市街は警戒警報の出るを待たずして猛火に包れたり。予は夢裏急雨の濺來るが如き怪音に驚き覺むるに、中庭の明るさ既に晝の如く、叫聲登音街路に起るを聞く。倉皇として洋服を着し枕元に用意したる行李と風呂敷包とを振分にして表梯子を駈け降りるより早く靴をはき、出入の戸を排して出づ。

都市爆撃(無差別爆撃)を体験した人の実に詳細な、生々しい記録である。さらに、このとき目にした周囲の状況について、

火は既に裁判所の裏敷丁の近きに在り。縣廳門前の坂を登りつゝ、逃走の男女を見るに、多くは寢間着一枚にて手にする荷物もなし。これ警報なくして直に火に襲はれしが故なるべし。

と書いている。「警報なくして直に火に襲はれし」とあるが、調べてみると、確かにこの焼夷弾空襲は警戒警報も空襲警報もないまま始まっている。

ただし、牛窓に置かれていた防空監視哨は、このとき敵機の飛来をいち早く捉えていた。そして当然

のこと、大阪にあった中部軍管区司令部へ緊急通信を行っている。にもかかわらず、あろうことか、司令部の担当将校は岡山への空襲はないと判断、岡山県防空課に空襲警報の発令を命じなかった。そこで牛窓監視哨では岡山の警防本部へ警報を出すよう電話するのだが、やはり司令部からの命令がないため警報は出されなかったという。市民にとっては何の前触れもなく突然空から焼夷弾が降ってきたのであった。

「多くは寝間着一枚にて手にする荷物もなし」という結果を招いたのは当然であった。逃げ遅れた人も少なくなかったのではなからうか。

このときは、荷風自身も「倉皇狼狽後樂園の河畔に走りしもの」とならざるをえなかった。これも『日録』の記事である。

旭橋に至るに對岸後樂園の林間に焰の上るを見しが、逃るべき道なきを以て橋をわたり西大寺町に通ずる田間の小径を歩む。

荷風は「旭橋」と書いているが、これは鶴見橋のことである。<sup>注</sup>松月を脱出した荷風は、隣接する「裁判所」や「縣廳」の前を通過、当時あった番町線の線路、そして旧津山往來を越えて鶴見橋の袂まで逃

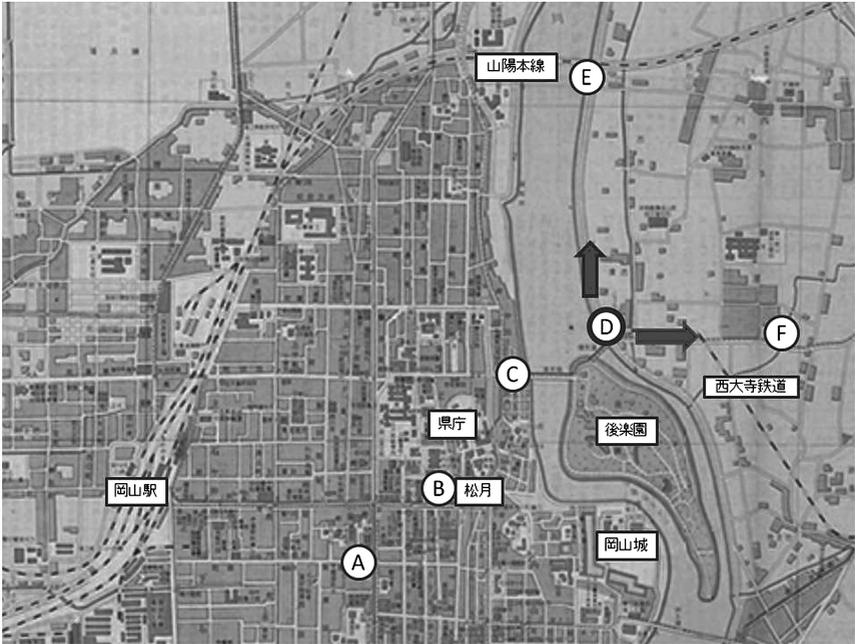
げてきた、ということになる。ところが、このとき行く手の後樂園にも火の手が上がっていた。鶴見橋は岡山市街のある旭川右岸側と後樂園のある中州を結ぶ橋である。河畔まで来た荷風はもう戻るわけにも行かず、意を決して橋を渡ったのである。そしてすぐに左に折れて中州と旭川左岸に架かる蓬萊橋を渡り、当時存在した西大寺鉄道（軽便鉄道）の後樂園前駅付近に出たということになる。

この松月から後樂園前駅付近までの逃走経路は、実は「補遺二」で詳しく示した6月18日の散歩コースであった。勿論その日に限らず近巷はよく歩き回っていた。日々の散歩で養われた土地勘が命懸けの逃走に役だったであろう。

この夜の出来事を地図（「最新詳密岡山市街地図」、昭和15年）上に示すと、次頁上段のようになる。まずAは米軍が焼夷弾投下の目標にした交差点である。Bは荷風が宿泊していた松月、それから渡るか否か躊躇したと思われる鶴見橋の袂がC、その後この橋と蓬萊橋を渡って旭川の左岸に。そこがDである。

さて、以上は『日録』の記事に従って荷風の必死の逃走経路を辿ったものであるが、荷風日記の原本である『日乗』では、当夜の逃走経路について触れ

岡山空襲下における荷風の逃走経路



ているのは一文のみである。6月28日の記事は短いで全文を示すことにする（荷風は深夜の出来事は前日の記事の中に入れていいる）。

六月廿八日、晴れ。旅宿のおかみさん燕の子の昨日巢立ちせしまゝ帰り来らざるを見。今明日必異変あるべしと避難の用意をなす。果してこの夜二時頃岡山の町襲撃せられ火一時に四方より起れり。警報のサイレンさへ鳴りひびかず市民は睡眠中突然爆音をきいて逃げ出せしなり。余は旭川の堤を走り鉄橋に近き河原の砂上に伏して九死に一生を得たり。

燕の子の巢立ちには危険を予知していたからかどうかはわからない。だが、そうだと信じてすぐに避難を始めた宿の女将さんの判断は正解であったわけである。そしてここでも空襲警報がなく、そのため人々は睡眠中に爆撃にさらされたと記されている。荷風もそのひとりであったわけだが、どのようにに火災から逃れたかは、最後の一文中に「旭川の堤を走り鉄橋に近き河原の砂上に伏し」とあるのみ。つまり、地図でいえば、D地点からの逃走経路のみとなっている。



現在のD地点（蓬萊橋東詰）

しかし、山陽本線の鉄橋は、地図上のEの位置であり、そこに行くにはD地点から「旭川の堤」を北方に移動しなければならぬ。この荷風は蓬萊橋東詰から旭川左岸の土手を山陽本線の鉄橋付近まで、つまりDからはEの方角に約1km走り、そこから河原に降りている。

ところが、先に見た通り『日録』では、鶴見橋を渡るところから示すと、

旭橋に至るに對岸後樂園の林間に焰の上るを見しが、逃るべき道なきを以て橋をわたり西大寺町に通ずる田間の小径を歩む。

とあった。

ここでは、鶴見橋と蓬萊橋の二つの橋を渡ったあとは、「西大寺町に通ずる田間の小径を歩」んでるのである。つまり、こちらの荷風は蓬萊橋東詰から旭川の堤を北方に走るのではなく、堤を離れ、地図上でいえば、DからFの方角に移動している。しかも、「小径を歩む」とある。ということは、もう危機を脱したと判断したのか歩いているのである。

これはどういうことであろう。Eの方向に走ったのであろうか、Fの方向に歩いたのであろうか。そのどちらであったのか、あるいはそのどちらでもな

かったのか。

荷風日記には、これまで見てきたように事実との間に齟齬があることもあれば、このように事実の見えない本文間の齟齬もある。荷風日記を読むには、それを踏まえておかねばならない。

### 三 なぜ電車で京橋へ

さて、ここで改めて荷風の5日連続の岡山市中散歩を眺めてみると、ここにも注目すべき点がある。

まず17日から19日の当初3日間の散歩の概要を示す。

六月十七日<sup>日曜</sup>晴、午前岡山神社を排し祠後の堤に出て岡山城を望見す、(中略)夜旅宿の室内蚊多く鬱蒸甚しければ出で、近巷を歩す、

六月十八日、晴、(中略)独昼飯を喫して後昨朝散策せしあたりを歩む、

六月十九日、晴、(中略)晩食の後菅原君と相携へて旭川の堤上を歩す、雲の間に半輪の月を見らる、

17日の「祠後の堤」、「近巷」、18日の「朝散策せしあたり」、そして19日の「旭川の堤上」も、いず

れも松月の近所であり、宿を出てその近辺を歩く典型的な通常の散歩であった。

しかし、20日と21日の両日の散歩はちよつと趣を異にしている。それがよくわかる部分を抜き出してみよう。

六月二十日、晴、午前暑さ甚しからざる中菅原君と共に市中を散歩す、まづ電車にて京橋に至る、……

六月廿一日、晴、(中略)晩飯を喫して後月よければ菅原氏と共に電車にて京橋に至り、……

両日ともまず路面電車を利用して京橋まで行つての市中散歩なのである。

京橋は、荷風が3日間散歩した辺りから約1キロメートル南の川下にあり、旭川の右岸と中州の西中島の間にかかる橋である。岡山神社の「祠後の堤」から下つていくとまず岡山城と後楽園をつなぐ月見橋があり(ただし、これは当時はなかった、歩行者用の観光橋である)、次に現在の県庁や県立図書館が袂にある相生橋があり、その次が京橋となる。

この両日はつねの散歩を省略してまっすぐ京橋に向かっている。よほど京橋に行きたかったのだろう。なぜか。

それは荷風の最も敬慕する成島柳北がかつて京橋のほとりで岡山の旅を楽しんでいるからではないか。「航蔽日記」<sup>(注)</sup>には、

京橋中橋小橋の三橋あり、此ほとりは皆熱鬧<sup>ねわどう</sup>なり、橋の傍らなる柏屋といふ割烹店に一酌す、などともある。荷風はそれまでも「航蔽日記」を2度読んでおり、全文を書き写してもいる。

ところが、この両日の記事には、柳北の名も「航蔽日記」の書名も出てこない。

一方、岡山を去って熱海の木戸正の留守宅にいた9月5日の『日乗』には次のように書いている。

九月初五、(中略)書齋は西洋づくりにて活版の書冊多し、偶然架上に柳北全集のあるを見出し驚喜して巻中の航蔽日誌を読む、余今黄薇の地を去り東行して熱海に来る、熱海は柳北が晩年病を養ひし処ならずや、余弱冠のころより柳北先生の人物と文章とを景慕して惜く能はざるもの、今その遊跡の同じきを知り歓喜の情更に深きを覚ゆ、

「航蔽日記」とはいわば岡山旅行記である。岡山での80日間は「その遊跡の同じきを知り」という状態が続いていたわけだが、荷風は一度も「歓喜の情」

を漏らしていない。

荷風日記は、心中に生起する重要な事象を秘匿しているのではないか。その心中と日記本文との間にも大きな齟齬がありそうである。

それはまたの機会に縷々明らかにしたい。

## 注

- (1) 『断腸亭日乗』からの引用は、断りのないかぎりすべて岩波版『荷風全集』(平成6年)による。これは『断腸亭日乗』の原本にあたる。
- (2) 『荷風罹災日乗註考』(石井哀草果編、平成12年9月)
- (3) 『第46回岡山戦災の記録と写真展 証言からたどる戦争と空襲』(岡山市、令和5年6月)
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 『罹災日録』(扶桑書房、昭和22年1月)
- (6) 「補遺二」でも触れたが、荷風はこの橋をなぜか「旭橋」としている。
- (7) 「航蔽日記」(『柳北全集』、博文館、明治30年7月)所収。

―てらそま・まさと 尾道市立大学名誉教授―